

メリンダとメリンダ

2005(平成17)年5月10日鑑賞(東京東和試写室)

★★★★



監督・脚本=ウディ・アレン/共同製作=ヘレン・ロビン/出演=ラダ・ミッチェル/ウォーレス・ショーン/ラリー・パイン/クロエ・セヴィニー/ジョニー・リー・ミラー/ブルック・スミス/キウエテル・イジョフォー/ジェフリー・ナフツ/ザック・オルス/アマンダ・ピート/ウィル・フェレル/ジョシュ・ブローリン/ダニエル・サンヤタ(20世紀フォックス映画配給/2004年アメリカ映画/100分)

第3章

じっくり、しっとり

……冒頭は悲劇作家と喜劇作家の議論から。仲のよい夫婦のアパートに妻の友人のメリンダが転がり込んできた。さて、そこから始まる物語は……？
メリンダは悲劇のヒロインに仕立て上げられるのか、それともハッピーなヒロインとなるのか……？ 両極に対置されるメリンダの人生が同時並行的に描かれるストーリーは新鮮で実に面白い！ 人生なんてこんなものさ……？

タイトルの意味

この映画のタイトルは『メリンダとメリンダ』。こりゃ一体なんだ？ さっぱりワケがわからない……？ しかし、この映画を実際に観れば、その意味が実によくわかるはず……。ネタバレになることを覚悟のうえで、以下この映画の面白さを紹介しよう。

面白い冒頭の議論

冒頭は、ニューヨーク・マンハッタンのピストロで議論する4人の男女の場面から。中でもその議論の中心は悲劇作家のマックス(ラリー・パイン)と喜劇作家のサイ(ウォーレス・ショーン)。ニューヨーカーたちの議論は、フランスのカルチェ・ラタンのカフェにおけるフランス人たちの議論とは少し異質……？ つまり、フランス人たちのそれは哲学的で難解だが、ニューヨーカーたちのそれはかなり即物的、すなわち男女の色恋沙汰……？

「人生は悲劇か、それとも喜劇か？」などというテーマを設定すればいかにも哲学的に聞こえるが（？）、要は同じ状況設定の中でそれぞれ異なる恋のストーリーを、マックスは悲劇的に、サイは喜劇的に作りあげていくというわけだ。そこでまずは、悲劇作家が語り始めたヒロイン、メリンドのストーリーは……？ これを受けて喜劇作家が語り始めたヒロイン、メリンドのストーリーは……？

それは180度異なる両極端なもの。同じメリンドの人生、とりわけメリンドの恋愛模様がなぜそのように違った方向に進んでいくのだろうか？ それがこの映画のテーマ。そしてそれが、男と女の永遠のテーマ……？

共通のストーリーは？

共通のストーリーを提供したのは、2人の劇作家とは異なる男性。いかにも自分が体験したかのように話し始めた彼のストーリーの主人公はメリンドという女性。メリンドは裕福な医者と結婚して2人の子供にも恵まれ何不自由なく暮らしていたにもかかわらず、不倫の末に夫と別れ、今ニューヨーク・マンハッタンにやってきた。そしてメリンドが飛び込んでいったのは、高級アパートの部屋で開催されているパーティーの中。ここまでは全く共通のストーリーだが……？

悲劇版の登場人物たち

悲劇版では、メリンドが飛び込んでいったパーティーを主催していたのは、失業中の俳優である夫のリー（ジョニー・リー・ミラー）と音楽教師をしている妻のローレル（クロエ・セヴィニー）の夫婦。リーとローレルは同級生だし、メリンドも同級生。そして、今日のパーティーにはもう1人の同級生の女性キャシー（ブルック・スミス）も出席していた。つまり、メリンドとローレルそしてキャシーは大学時代の仲良し3人組というわけだ。メリンドの親友のローレルとキャシーは、不幸な境遇にあるメリンドを立ち直らせるため、男やもめの歯科医バド（ジェフリー・ナフツ）を紹介したが、メリンドはその席で偶然出会ったピアニストのエリス（キウエテル・イジョフォー）に一目惚れ……。これだけなら、場合によればハッピーエンドも可能だが、悲劇作家は当然のようにその後の悲劇的結末に向けてさまざまなストーリーを創設。さてその結末は……？

ハッピー版の登場人物たち

パーティー現場に飛び込むストーリーは同じでも、悲劇版は同級生のアパートだったのに、ハッピー版は見ず知らずの人の部屋。このパーティーを主催しているのは、映画監督の妻スーザン（アマダ・ピート）と売れない俳優のホビー（ウィル・フェレル）夫婦。そこに突然飛び込んできたのが、睡眠薬を飲んでフラフラになったメリンダ。ところが彼女が語る身の上話にパーティーは意外な盛り上がり……。同じアパートに引っ越してきたメリンダが不幸な境遇にあることを知ったスーザンは、メリンダに裕福な独身の歯科医グレッグ（ジョシュ・ブローリン）を紹介すると、恋愛に前向きなメリンダはたちまちグレッグといい雰囲気……。しかし、このままメリンダとグレッグがハッピーエンドになったのではストーリーはあまりに単純すぎ……。

そこでハッピー版の劇作家がつくり出した物語には、悲劇版と同じようにピアニストのビリー（ダニエル・サンヤタ）が登場し、ビリーとメリンダが恋に落ちるのだが、さてその結末は……？

メリンダとメリンダを演ずるのは？

悲劇版メリンダとハッピー版メリンダの両者を演ずるのは、最近『マイ・ボディガード』（04年）や『ネバーランド』（04年）で人気急上昇のラダ・ミッチェル。同じ役者が同じメリンダという人物に扮しながら、よくもここまで両極端なストーリーに即して2人のメリンダを演じ分けることができるものだとホトホト感心。そのうえ、何せ根が美人だから（？）観ていて気持ちがいい。悲劇版では、一時もじっとできず、イライラしながらいつもたばこの火ばかりつけている姿を強調することによって、見事にその不安定な精神状態を表現しているが、それでも美人はやっぱりトク……。

人殺しまでした（？）、ちょっと精神的に異常かもしれないメリンダでも、そのチラチラと見せる胸元を含め、その魅力や色気は相当なもの。ハッピー版もいいけど、悲劇版でもメリンダの魅力（？）はいっぱい……。もっともそれに惹かれるとちょっと怖いけど……？

歯科医よりピアニストの方がモテるのは当然……？

悲劇版もハッピー版もかわいそうな境遇にあるメリンダに紹介される男性は歯医者。これは、離婚したメリンダの前夫が医者だったこともあるのだろうが、何となく……？ ところが本命は両者ともピアニスト！ 悲劇版におけるピアニストのエリスによる女の口説き方は超一流で大いに参考になるもの(?)だし、ハッピー版におけるピアニストのビリーは著名人(らしい)だから、ピアニストの方が歯医者より女にモテて当然……。しかし、こりゃ一種の職業差別……？

ところで弁護士は？

悲劇版に登場するキャシーの夫ピーター(ザック・オルス)は弁護士だ。ところがパーティーの席では、なぜか彼は自分で「しがない弁護士です」と自己紹介している。そして現実にも彼は、メリンダに対してメリンダの子供の親権をめぐる闘いに敗れたことを知らせるだけのホントにしがない弁護士……？ ピアニストを「主役」にするために、医者も弁護士も軒並み切り捨てられている(?)のは少し残念だが、やはりピアニストの魅力に勝てないのは当然か……？

スピーディーな展開に拍手！

この映画はメリンダとメリンダの悲劇版とハッピー版を同時並行的に描くものだから、時間的には2時間を大きくオーバーしてもやむをえないもの。しかしこの映画はそこをきっちり100分に収めているため、展開はきわめてスピーディー。それでいて、この映画が伝えたいヒロインであるメリンダの生き方、恋愛観、悲劇版とハッピー版の対比を十分楽しむことができる仕上がりになっている。

これは監督・脚本のウディ・アレンの力量に負うところが大きい。1935年生まれのウディ・アレン監督はこれまで34本の長編を発表し、アカデミー賞監督賞に6回、脚本賞に13回ノミネートされているとのこと。その代表作である『マンハッタン』(79年)や『ギター弾きの恋』(99年)について私はその評判は聞いていたものの、まだ観ていない。本作に大いに感心した私としては、今後は非次々とウディ・アレン監督作品にチャレンジしたいものだ。 2005(平成17)年5月11日記